

図には、次の文がある。

大至極上上吉 方今浪花俳優惣巻軸取締 家号 音羽屋

無類稀者兼ル尾上多見蔵 俳名 始メ松朝
後二松玉

尾上多見蔵八大坂の 出生 にして幼年のころよりふかく

劇場の道を好ミ俳優のまなびを做すに 頗る妙を得たるを

以て 其父故中村歌 右衛門加賀谷 梅玉の門人となし始めて名を

中村和市と号し該地子供芝居へ 出勤なしが実に

好こそ物の上手なりと古き言の葉に違ひなく 成長に随ひ

追々評よく其伎芸の非凡ならざるを 人皆賞誉せり

其頃三代目故尾上菊五郎 誹名梅幸 見る所あつて 其師梅玉に

乞得て門弟となし尾上民蔵 誹名松朝 と号すその後

文政三庚辰年十一月師の招きにより初めて江戸

木挽町河原崎座へ下る時に年二十一歳顔見勢

狂言「伊勢平氏額英幣」に 大夫進朝長の役 牛若

出立の御目見得評よく同四辛巳年民の文字上に

さ八る事あつて多見蔵と改たむ「敵討櫓太鞍」に

磯貝藤助の

役同じく

七月

狂言 「玉藻前」

くもめのはれぎぬ
雲井公服」

とねりミねわう
に舍人峯王

さるまハ
猿廻し三作の二役 「菊宴月白浪」 塩冶縫殿介

ミどりのはなはるつげそが
同五壬午年春 「松梅鶯曾我」 に箱根の 児閉坊

まるそが
丸曾我の団三郎白柄重三郎の三役 「靈駿龜山鉾」

とくろくき
に轟 金六右いづれも評よく 就中此 金六の役別て

でき
評よく大出来大当りにて 当時若手の小手

きく
利と賞誉せらる同九月「御ぞんじ 東伽羅」に

やまなかしか
山中鹿之助 切狂言 「女猿回し」 故中村大吉巴丈
家号鳴尾屋一世

いづくやでんへゑ
一代に井筒屋伝兵衛の 役評 よくこれを当地

なごり
の名残として 故郷へかざる 東 錦絵 その年

きやうと
十一月 京都の 顔見勢へ 出勤 なし翌未年

はんち かへ
坂地へ 帰り 文政七申年廿五歳にて

なだい
名題へのり 芸道を 励ミ切瑳琢磨

こう
の功を 重ね 大ひに 人氣に 叶ひ

つひ おほたてもの
遂に 大達者 となり 立役

やつしぶだうたちうちをんながたしよさ
和実武道太刀打女形所作

事の

名手と声誉八 普く江湖に美名を

轟かせり夫より十九年自天保十二

辛丑年五月 再び江戸堺町中村

座へ下る時に四十二歳 狂言名題

「裏表千本桜」に佐藤忠信

源九郎 狐百姓 きよと作

の三役二番目新田

梅次郎こしもと

於つるの轆轤首

古今の大入り

大当り同七月

「天竺徳兵衛／万里入船」に

天竺徳兵衛大工

の六三高橋左一郎

同亡霊にて 精霊棚の怪

談これ又大当り大 評判

同十月「くくわつのはなあやつりばんしょう」葛の葉

奴与勘平二番目〔双蝶〕
曲輪日記

に放駒 長吉 長五郎 切〔猿廻し〕に与二郎
海老蔵

の役荷れも大入大当りなりしが

興行中芝居類焼 に付 休業翌 十三

壬 年春河原崎座へ出勤 〔飾海老曾我門松〕
寅

に鬼王新 左卫門二番目〔双蝶〕に放駒 長吉

大切五変化の所作事奴胤の宙乗大当り

是にて帰坂なせしが同年十一月又々河原崎

座へ下り顔見勢〔天竺徳兵衛韓国漸〕

に奴岡平 切狂言〔猿廻し〕に

与二郎の役然るに 興行中

河原崎座 猿若 町三丁目工

ところがへおほせいだされそくじつきう
所替被仰出即日休

業二付坂地へ帰る

夫より四年目

弘化 三丙午年

江戸猿若町中

村座下下り〔四度目〕

〔日吉丸稚桜〕に猿之

助久吉ひさよし二番目ふたつてふ「双蝶ふたてつ」に

放駒はなれこまの長吉ながきちいつもながら評

よく「廿四孝かう」に横蔵よこざう回四丁かいしやう未

年春としはる「曾我初夢そがのはつゆめ」におし鳥とりの精せい

小林こばやしの朝比奈奴矢田平あさひなやつこやだへいの三役

同三月どうがつ「薄雪うすゆき」に葛城民部かつらぎみんぶ二ばん目

「関取せきとり二代勝負附だいしやうぶつけ」に鬼ヶ嶽おに高倉隼人たけたかくらはいとの

二役にやく「義士銘々伝ぎしめい」に堀部安兵工寺岡ほりべやす てらをか

平右工門へいゑもん「五人男ごにんをとこ」に布袋市右工門ほてい

切狂言きりげん「兜軍記かぶとぐんき」に岩永左工門いわなが もんの役

「源平布引滝げんへいぬのびきのたに」に斎藤実盛何さいとうさねもりいつれも

大出来大当りおほでき あたにて同年どうねん十一月浪花なにハ かへへ帰る

年としつもって五十八歳該地さいがいちに於おいても当りあた

狂言枚拳きやうげんまいきよするに違いとまあらず又ちやうなんわいち嫡男和市ちやくなんわいち

二男市川市蔵じなん にかわしやうしやうざういづれも御当地ごたうちへ下りくだ

芸道げいだうを励はげミ大達者だてものとなりしが花はなに嵐あらし

の譬たとへにもれずりやうにん両人りやうにんとも帰坂きはんの後のち二男市蔵八

角かどの芝居しばいへ出勤しゅっきんし白井権八しらゐこんの立腹たちばら「国姓爺こくせいや」に

錦祥女の役をつとめ大評判になりしが狂言中

急症にて帰らぬ旅へ趣むきしかバ

父松玉が悲歎思ひやられ

三都のひるぎ

連中涕

泣し

て

各々袖

を絞りける

又和市八業を

転じ茶道の宗

匠となりしが

明治十年病死なし

斯る不慮の災厄の累りしも

平常剛気性質故さらに屈する

気色なく京坂

其他の国々へ

出勤

老て

ます
きりよく
気力

たゆ
たえず
搦まず
壮年

はいゆう
はい
俳優の輩を
教授

すといふ
なほさいハビ
尚僥倖なるハ
別腹の三男

尾上梅朝
ばいてう
初名
三蔵
三十三歳芸道を勉

きやう
ひやう
強してすこぶる
評よく方今一軒の

しばぬ
を
劇場をあつかり居れば遠から

す
おの
御当地へまかり下り
各々さま

おんめミえ
まつ
方へも御目見得いたすべく先ハ

ことくわんせい
しゆつ
多見蔵 事實政 十二庚申年の出

しやう
いたり
生にして当明治十二己卯年二至

かうじゆ
八十歳の高寿

たも
を保ち

て

いよさうけん
こんはん
愈壯健なり今般東京

ひさまつざしんぶたいかいぢやう
おう
久松座新舞台開場のまねきに応じ

だん
くわんじゃく
市川団蔵九蔵改中村 翫雀 尾上多賀之丞

等とともに三十二年ぶりにて(五度目ナリ)

上京じやうきやう なしひな 久々ひなにて御目見得おんめみえにつき

かねて工風くふうを凝こらせし新發明しんはつめいの狂言きやうげん

を演あずるよし実じつに古今ここんみそつ未曾有はいゆうの俳優はいゆう

にこそ

右心需

劇場山人撰

乍揮口上

一東京御区中様益御機嫌能被遊御座恐悦至極ニ奉存候随而私義

若年じゃくねん之砌ミぎりより数度御当地江まかりのぼ罷登かくへつこひるぎり格別御鼻眞おんひなま御引立ニ預り候段

心魂しんこんにてつし難有仕合奉存候然ル所今般当久松座之招まねきに心おうしし

老衰らうすいもかへりひさびさ久々ひさびさにて御目見得おんめみえ仕候間可おんめみえ御ひるきの御余光ヲ以て

開場より賑々敷永当く御光来之程偏ニ奉希上候以上 尾上多見蔵

唯あつき恵ミを 松玉「印」

あふく扇かな